

ながめせしまに

半村 良

ながめせしみに

半村
良



掲載誌一覧

ながめせしまに 『別冊小説新潮』昭和四十九年夏季号
置手紙 『問題小説』昭和四十九年十月号
酒場が潰れた日 『小説推理』昭和四十九年五月号
酒亭拔荷丸 『小説現代』昭和五十年三月号
恋日窓夜 『問題小説』昭和五十年二月号
ふたり呑んべ 『週刊小説』昭和四十九年十一月二十二日号
白い円盤 『週刊現代』昭和四十九年八月二十二日号
スポンサーが死んだ日 『小説推理』昭和四十八年九月号
カメラマンが死んだあと 『小説推理』昭和四十九年一月号
夜泣蕎麦借肴曙 『別冊小説宝石』昭和四十八年爽秋特別号

ながめせしまに

昭和五十年三月十日 初刷

著者 半村 良

発行者 徳間康快

発行所 株式会社徳間書店

東京都港区新橋四一〇一

電話東京（四三三）六二三一

振替東京四四三九二

本文印刷 株式会社清水印刷所

カバー印刷 真生印刷株式会社

製本 大口製本

© Ryō Hamura, 1975

半村良作品集／ながめせしまに／目次

ながめせしまに 3

置手紙 37

酒場が潰れた日^ベ 71

酒亭拔荷丸 103

恋日恋夜 141

ふたり呑んべ 173

白い円盤 205

スポンサーが死んだ日 229

カメラマンが死んだあと 267

夜泣蕎麦^{よなきそば}借肴^{かりぎのあけほ} 299

装幀／矢
吹
申
彦

ながめせしまに

その建物は日比谷公園に程近い場所にあった。今ではあたりの新しいビルに較べると高さも低く、すっかり古びて見えるけれど、その分だけ重厚で風格があり、正面玄関のドアのあたりを飾る真鍮の金具類も綺麗に磨きたてられていて、昔日の権威をまだ充分に保っている様子であった。

その真鍮の金具がついた正面玄関の重いドアを押して入ると、高い天井から古風なシャンデリアを吊した大理石の床のロビーなのだが、今日はそのゆったりとしたロビーの左側の壁にそって、真紅のカーペットが敷いてあった。

そこには黒漆の華奢なこしらえの洋卓が置いてあり、壁を背にして和服の男が二人、人待ち顔で椅子に腰掛けていた。どちらも四十はとうに越えた年配で、いずれにせよ商家の人間だろうが、人に使われているようには見えなかった。二人の前のテーブルには、やはり黒漆の角盆が置いてあって、その上に白い封筒が三、四十も積まれている。左の端のほうには幾分黄ばんだ素木しらぎの札が立ててあり、達筆で二字、「扇会」と書いてあった。

その二人が椅子を立った。外の歩道から短い石段を登って来る客に気付いたのだ。グレイの夏服を着た背の高い男がドアをあけ、和服の女があとに続いた。

「また来てしまったな」

男はテーブルの前で言った。笑いを含んではいるが、落着いた渋い声であった。女がハンドバッグをあけ、白い封筒を出してテーブルへ置く。

「須藤さまのお顔を拝見いたしませんと、扇会もさっぱり氣勢が上がりませんで」

少し年嵩らしいほうが言い、もう一人は女が出した封筒を丁寧に受取って盆の上へ積んでから、
「それではどうぞ、ごゆっくり」

と、大理石の床の上へ敷きのばした真紅のカーペットを踏んで、エレベーターのほうへ歩いて行った。

「ちょうど本日は叶屋も参っております」

「ほう、珍しいな。あの老人も元気なものだ」

「それに……」

和服の男が言い淀んだ。連れの女はもうエレベーターの前にいて、須藤は男の顔と女の背中へ交互に視線を走らせながら声をひそめた。

「ほう、来てるか」

「はい」

須藤もエレベーターへ歩きだした。

「久しぶりだな」

二、三度軽く頷いて見せる。

「ではどうぞ、ごゆっくり」

エレベーターのドアがあいて、和服の男たちは声を揃えた。

四階でエレベーターから出るとすぐ、須藤はあでやかに装った女たちの群れにまぎれ込んだ。洋装の女もいることはいたが、大半は単衣ひとえの和服姿であった。大きな広間が呉服の展示会場になっていて、角帯を締めた男たちが、慇懃な物腰で女たちの間を動き廻っている。

展示会は賑わっているが、ひどくおっとりとした物静かであった。扇会は東京でも最高級の呉服屋の集団である。展示会の伝統も古く、招待する顧客の選び方にも格式があつて、扇会の招待状を受取ること自体が、すでに粒よりの着巧者という意味になっている。従つて、芸者やホステスでもトックラスだけだし、そういったいわゆる玄人筋くろうとが富裕な階級の夫人たちの間で昔ながらに遠慮がちなマナーを保っているのも、おのずから扇会の伝統と権威を示している。

須藤が連れの女と会場を半周ほどしたところで、小柄な老人が番頭風の男を従えてやって来た。

「本日はお越し頂きまして……」

「やあ、叶屋さん。元気ですな」

「いや、これでもう扇会へ出るのもしまいかも知れません」

老人が笑った。連れの女が振り返って老人に目礼を送る。

「どれかお気に召すものがございましたでしょうか」

老人に言われて女は気おくれしたように須藤へ視線を移した。

「この人が有名な叶屋のご主人だ」

「はじめまして、よろしくお願い申し上げます」

老人はにこやかに言う。

「何しろきものの神様だ。この人にかかるとどんな高いものを買わされるか判ったものじゃない。被害予防のために俺は向うへ行つて昔ばなしでもしている。君はこの番頭さんについていてもらいなさい」

「被害はございませんでしょう。相かわらずお口の悪い」

老人は須藤に肩をかかえられるようにその場を離れながら、そう言つてうれしそうな笑いかたをした。

「麻布が来ているそうだな」

会場の出口のあたりへ行つてから須藤が言つた。

「お見えます」

老人はちよつと湿っぽい顔になつて須藤を見た。

「相かわらずお綺麗で……でも少しお寢れになつたのではございませんでしょうか」

「ほう、そうかね」

「お元気がないようです。ろくにごらんにならずに、さきほどからあちらに坐つておいでです」

「それは妙だ。あの着物気違いが扇会へ来て……」

すると叶屋の主人は皺だらけの顔を一度に綻ばせる。

「もっとも、あのお方にはもうお着せる品はございません。近頃は呉服もとんだらしなくなつてしまいましたから……織りも染めも職人らしい職人はいなくなりまして、ああいうお方におすめできるものはもう」

「まさか。以前より凝つた着物が多くなつたようじゃないか」

「いいえ、あのお方はきつとそれが一目でお判りになったのでしょう。手前などはもう恥ずかしくて、来年からはこの会へも出るまいと、本気でそう思っていたところでございますよ」

「けしからんな。扇会へ来て叶屋にいやがらせをするとは」

冗談半分に言つて、須藤は広間の外へ出た。

「どこにいる」

「あちらでございます」

焦茶色のカーペットを敷きつめた通路の奥に、どっしりとしたソファを幾つか並べた、ラウンジ風のコーナーが見えている。

「会つて来るか」

須藤がそのほうへ去りかけると、老人は黙つて頭をさげた。

永坂綾江は大きな窓に向つて据えられたソファに浅く腰をのせ、どこか陶器めいた冷たい横顔を見せていた。

それが、須藤が近寄つて行くと、不意にすらりと立ちあがった。彼の姿が窓ガラスに映っていたのかも知れない。

「会うような予感がしたわ」

掠れ気味の声で言った。生れつき気管支が弱く、ちょっとしたはやり風邪にも人一倍寝込むたちであつた。

須藤は綾江の立ち姿をみつめて黙り込んでいる。いつものことだが、綾江に会うたび彼は或る感

動に似たものを覚え、つい口が重くなるのだった。

単衣の訪問着を着ていた。梨地の紋綸子りんすに太い筆で叩きつけるように引いた大胆な線が何本か走っている。線の色は金茶から焦茶までの間を微妙に変化させてある。帯は漆黒の絹綴ちうれで、よく見れば臙脂の細い縦縞が入っている。帯じめべは金茶。

いわゆる水商売の女にしては、全体の印象がきつすぎた。近寄りがたい冷気が、いつも綾江の身辺に漂っているのだ。それでいながら妖しい色気が滲み出ている。いったい何者なのか……。男にも女にもそう思わせる。

須藤は肩の力を抜いた。

「半年ぶりだな」

「専務におなりになったのね」

「引きこもっているそうだが、相かわらず早耳だ」

須藤は綾江が坐っていたソファーのとなりへ静かに腰をおろし、煙草をだして火をつけた。綾江は立ったまま、それをとらえどころのない表情でみつめている。

「いま叶屋に会った」

煙を吐きながら須藤が言う。綾江はどうやら彼の白いものが目立ちはじめた髪を見ているようである。

「もう着物にも興味がなくなっただか」

「そう、叶屋さんが気にしているのね」

「どこか悪いのかね」

須藤は綾江を見あげた。彼には窺れているようには見えない。もともと背丈のわりに顔が小さく、肉の薄い感じの女なのである。目鼻だけは鋭角的で、それでいて細く長い首のあたりにはふつくらとした色っぱさがあった。

「別に……」

「ではなぜいつものように見てまわらないのだ。扇会だけは死ぬまで欠かさずに通うと言っていたじゃないか」

「だからこうして来ているでしょう」

「それはそうだが……」

「来てすぐ叶屋さんの顔を見たら判ったのよ」

「何がだ」

「今年はいいものがないわ」

「なる程。君くらいになるとそれが判るのだな」

「それに、もう……」

何か言いかけ、綾江は口をとじた。

「もう何だ」

「あなたと知り合ってから何年になるかしらね」

綾江は須藤から視線をそらし、窓際へ行つて外を眺めた。すぐまぢかになり、のビルの窓が並んでいるだけであった。

「十七年……十七年と四ヵ月だ」

「四九月」

そうつぶやき、背中を見せたまま綾江は軽く笑ったらしい。

「あなたって、かわらない人ね」

「これでもいいぶかわったつもりだ。悪くなったよ。酒もめっきり弱くなったしな。……人間、悪くなる分だけ酒が弱くなるらしい」

「受け売りね、それ」

「そうか」

須藤は少しうろたえたように言った。

「随分以前だけれど、そういうことを言った人がいたわ」

沈んだ声であった。

その頃、有島常平はまだ精気に溢れていた。綾江は自分を彼のなすがままにまかせ、夜具の中に体を漂わせていればそれでよかった。切れ者と人に噂され、財界きつてのダンディと自他共に許す有島には、綾江のほかに四人の女たちがいた。本郷の邸にいる本妻は古風な女で、そういう夫の女道楽を黙認することを自分のつとめのひとつと考えているらしかった。

その頃の綾江にしてみれば、ひどくけがらわしい姿勢をとらされたとき、有島はいま須藤が言ったのと同じ言葉を吐いたものであった。

「こういう生活をしていれば、俺だって悪くなるさ。でも悪くなった分だけ酒が弱くなった」

……だからかまわないだろうという意味であった。どういうわけか、綾江は自分の男が酒を飲む

のを好まなかったのだ。

綾江はあらがい、かえって男の情炎をかきたててしまったらしい。たくましい腕で腰をとらえられ、やがて綾江自身その背徳の匂いのする姿勢に刺戟されて我を忘れた。

有島の部下の一人として、須藤が綾江の前へ現われたのは、そういうことがあった何年かあとのことである。

「あなたの言い方のほうが少し優しい感じだけだ」

綾江は表情を変えずに言った。随分あとになってから、須藤にもその姿勢をとらされてしまったことがあった。須藤は酔っていたが、綾江の肌の扱いかたは、有島に較べるとずっと優しかった。

「おりつさんは元氣かね」

須藤は話題をかえた。さりげない綾江の言葉の中に、掘り起せばまだ幾分かはなまぐさい事柄へのつながりを感じ取ったのであろう。

「ええ、元氣よ」

「平穩無事か。とうとう俺は何ひとつ変えられなかった」

須藤はけむりの立つ煙草を手し、目をとじて言う。

「君のくらしに波風を立てたかった。いや、どうでも立てて見るべきだった」

「よして」

斬って棄てるように綾江が言った。須藤は目をひらいた。叶屋の老主人にもう着せるものがないと嘆かせる程見事な和服姿がそこに立っていた。

「扇会で会うのもいつまでのことか……。どうだ、俺に買わせてくれんか」

視線がからみ合った。綾江の眸にはなぐさめるような色が、須藤のほうには名残りを惜しむような色が泛^{うか}んでいた。

その綾江の視線がふとそれて、須藤のうしろへはしった。

くすんだ白地に淡い青で北山杉を染めあげた単衣を着て、須藤の連れの女が足早に近づいて来る所であった。

「あの……」

須藤に言いかけ、大きなゴムの鉢植のかげになっていた綾江に気付くと、はっとしたように足をとめた。ふつくらとした、やや大柄の美女であった。

須藤はふり返り、かすかに苦笑した。女は怯えたような目で綾江に会釈をし、

「失礼しました」

と言う。綾江は頤^{あご}を引くようにしてそれにこたえた。

「何だ」

「見ていただきたくて」

「今行く。先に行っていないさい」

女は細い声ではいと答え、もう一度綾江に会釈してから、慎重な裾さばきで戻って行った。

「臍^{へり}帯はいいわね。叩き染めでしょう。あなたのお見立てね」

「ああ」

須藤はあいまいに答えた。綾江の顔にはじめて微笑が見えた。